

『お嫁にしてね』

著：森本あき

ill：ホームラン・拳

「まあ待て」

バスルームを出ようとしたら、腕をつかまれて。木実は目をぱちくりとさせた。

待つ？ なんで？ このままここにも、流一を怒らせるだけなの？

「裸エプロンそのものにはそそられない、って気持ちは変わらない。けど、ここにシャワーがある。濡れた服から肌が透ける、なら、なんかエロそうだ」

「…でも、流一」

今回は、流一の言いたいことがちゃんと分かる。この手の話だけ理解が速いんだな、と、いつも笑われてしまうけれど、それは、たぶん、木実が必死だから。

会っているときにしかできない行為。

声を聞きたい、と思えば、電話がある。

何か報告したい、なら、メールですむ。

だけど、これだけは。

流一と肌を合わせることだけは。

こうやって、本人の近くにいないと無理だから。

木実は少しのサインも見逃さないようにがんばっている。

いまの発言は、エプロンつけたまま一緒にシャワーに入ればその気になるかもしれない、という意味だ。

「なんだ？」

「疲れてるんだよね？」

普段みたいに、意地悪を言う気力もないぐらい。

「疲れてる俺をその気にさせる自信がない、と？」

「あるよっ！」

挑発するような言葉に、思わず、そんなことを言ってしまった。はっと気づいたときは、もう遅い。流一は目を細めながら木実を見る。

「じゃあ、してもらおうか」

流一は浴室に入って、シャワーを出した。しばらく手をつけて、温かくなるのを待っている。

シャワーだけじゃなくお風呂に入ったほうがいいよ。そうじゃなきゃ、疲れ取れないから。

いつもなら、そうやって注意するはずなのに、いまは口が開かない。のどの奥がはりついたようになって、からからに乾いている。

その気にさせるのって、どうすればいいんだろう。

いまさら、そんなことを考えている。

シャワーでエプロンを濡らして、それが透けたとしても、流一をその気にさせられなかったら、つぎはどうしたらいい？ 肌にぴったりと張りつくようにエプロンを引っ張ってみる？ それとも、エプロンはあきらめて、流一自身を手で触ったり、口に含めば大

丈夫だろうか。

でも、それだったら、シャワーと一緒に浴びる意味はない。

ぐるぐると考えをめぐらせている間に、流一はさっさとシャワーを浴び始めた。頭からお湯をかぶって、うー、と気持ちよさそうにうめいている。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

木実はしばらくその場に突っ立ったままだった。流一が背中側をシャワーに当てるために木実のほうを向いた瞬間、木実は中に入る。

ええい、もう、どうとでもなっしまえ！

いっぱい悩むくせに、最後は猪突猛進。壱伊からは、悩み損だから、最初から何も考えずに行動すればいいのに、とからかわれている。

でも、いったんは考えないと先に進めないのだ。流一に、どうしておまえはそう唐突なんだ、とあきれられるのは、最後の結論部分だけを口にするから。悩んでる過程を見せていないから。

いまもきつと、流一からは自信ありげにシャワーの中に飛び込んだように見えているのだろう。

それで、いい。

シャワーのお湯が前面に当たって、少しずつエプロンが濡れてきた。ぴたっと張りつくと同時に、少し重くなってくる。洋服を着たまま海に入ったときのような、ちょっとした不快感を覚えた。

「ふーん」

流一は一步退いて、木実をじっと見る。その、ふーん、はどういう感情から出たのか知りたいけれど、全然分からない。

ふーん、まあ合格、なのか、ふーん、やっぱりダメだな、なのか、そのどっちに近いのか教えてほしい。

「透ける、って、結構エロいな」

ほっとしたあまり、木実はその場に崩れ落ちそうになった。

よかった。裸エプロンそのものは失敗だったけど、これはどうやら成功のようだ。

「脱がせりゃ見えるのに、そこをあえて何か着させたままなのがいい。ここも」

ここ、と同時に乳首を、ピン、と弾かれる。木実の唇から、小さなあえぎが漏れた。

「ピンクなのは分かるけど、乳輪と乳首の境目はまだ見えないな。いじったら、乳首がとがってくるからはっきりするかも」

流一はにっこりと笑う。

この笑顔をよく知っている。何かひどいことをしようとするとき特有のものだ。

木実は警戒しつつ、首をかしげながら流一を見た。

「どういうこと？」

「俺に、どこが乳首なのか教えろ」

…ほらね、やっぱり。

木実は内心でため息をつく。

絶対にそんなことを考えてると思った。

自分で乳首をいじれ。

つまりは、そういうことだ。

「それとも、ここから出るか？」

やらないなら、おまえに用はない。

そんな追い討ちまでかけてくる。木実はぎゅっと唇を噛んで、エプロンの脇から手を入れた。それを流一が止める。

「手を隠されたら、いじってるところが見えないだろ。エプロンの上からだよ」

カッと顔が赤くなるものの、木実に拒否権はない。

裸でベッドの上にいる相手は礼儀として抱くけれど、ちょっとでも抵抗したり、いやがったりするなら、めんどくさいからパス。

それが、流一の考え方。

だから、木実は流一の望むようにするだけ。

木実はエプロンの上から両方の乳首を同時につまんだ。きゅっと指に力を込めると、そこが、じん、としびれてくる。男でも乳首を感じるなんて、流一にそこをいじられるまで知らなかった。いまは、最初るときよりも、もっと敏感になっている。

「あっ…んっ…」

くに、くに、と指を動かすと、乳首が少しずつ硬くなってきた。ぷつん、ととがって、指にその存在を知らせてくる。エプロンでさえぎられているせいか、いつもよりもゆるやかな刺激に、木実の指に知らず知らずのうちに力が入った。

強く引っ張る。指で挟む。左右に回す。そうやっているうちに、乳首は芯が入ったようになる。エプロンを押しあげて、つん、としこっているのがはっきりと分かった。

「乳首っ…」

木実は潤んだ目で、流一を見つめる。気づいたら、シャワーが止まっていた。さっきまで水音でかき消されていたのに、濡れた布の上から自分の乳首をいじっている、ちゅく、という音が響いている。

「見える…？」

本文 p56～61 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>